

---

# 魔王勇者物語

猫山 茶太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王勇者物語

### 【Nコード】

N0105Y

### 【作者名】

猫山 茶太郎

### 【あらすじ】

初の投稿になります。

これから脳内の妄想や思いつきをどんどん形にしていきたいと思います。

いきなり連載小説書いて大丈夫なのか自分。目指せ完結！

## 召喚されたのは…(1)

薄暗い牢獄の奥深く。

数ある牢の中でも特に嚴重な造りをしたそこには、

両手と両足に枷を着けられ、幾重もの鎖に拘束された囚人の姿。

見にまとう布はボロボロで、もはや衣服とは言えぬ有様。

元はさぞ美しかったであろう銀髪は、色艶を失い、足元まで伸びきり、散らばっている。

ここに囚われて幾年。

食事も水も与えられず、生の気配が欠片も感じられぬ永遠の間。

囚人の肉体と精神は限界を迎えようとしていた。

「これまでか…」

乾いた唇から漏れ出す声は、耳を澄ませても聞き取れぬほどに弱い。

囚人は自分の中から、急速に熱が失われていくのを感じた。

意識がぼんやりと薄れ

奇跡が

起きる。

囚人が最期の間際に見たものは強烈な光。

囚人の身体は光に包み込まれ、消え去った。

気がつけば光の中にいる。

その光は優しく、暖かく、囚人の身体を包み、癒していく。

「この光は…?」

しばらくして、光は少しずつ薄れ、代わりに気配が感じられるようになった。

それは囚人を取り囲むようにして存在しているが、敵意はないようだ。

むしろ期待や希望といったものを感じる。

「もしや、この気配…」

光が完全に消え去ると、それらの気配は驚愕に変わった。場を沈黙が支配し、まるで時が止まったかのよう。

囚人がゆっくりと目を開いていけば、はっと息を呑む気配。周りを見渡せば、囚人を取り囲む多数の人間。

「やはり…か。」

誰もが驚きに目を見開き、硬直していた。

中には気を失い倒れている者もいるようだ。

やがて、いち早く我に返った人間が、震える声で言葉を放つ。

「ま…魔族…」

それは蚊の鳴くような小さなものであったが、しんと静まったこの場には十分なもの。

止まった時は動き出し、人々はたちまち恐怖に支配されていく。

「なぜ魔族が?!」「死にたくない!」「助けてくれ!」

我先にと押し合いながら逃げ出す者たち。

混乱した中、武器を持った者たちが、それを囚人に突きつけ、素早く取り囲んでいく。

よく訓練された兵士だと、囚人は思った。

「私は何もせんよ。」

そう言つて囚人は、じらりと鎖がぶら下がった両手を挙げて、降参の意思表示。

「いきなり逃げんでもよかろうに…」

溜息と共に言葉を漏らす。

その姿は、なるほど、足元まで伸びた長い髪は銀色、髪の間から覗くのは尖った耳、

濃い褐色の肌、紅く輝くルビーのような瞳。

この世界で魔族と呼ばれる者の特徴を全て揃えていた。

「ところで…」

自分を取り囲む兵士たちを見回す囚人もとい魔族。

その中で隊長らしき姿を見つけると、その者に声をかける。

「すまぬが、何か着るものを貸していただけぬだろうか。」

隊長らしき者は、話しかけられたことに驚き、そして視線を下へと移し、赤面。

他の兵士もそれに釣られるように視線を動かし、

頬を染める者、目を逸らす者、武器を落とし慌てて捨てる者。

囚人が身に着けているものは、衣服の役割を果たしていないボロ布と鎖がついた枷のみ。

つまり半裸状態で、柔らかそうな肌と男性には無い二つの膨らみと

…が晒されている。

ようするに、囚人は魔族で、女性であった。

場は妙な空気に支配され、兵士たちは目を逸らし、どうしたものかと困惑する。

その中、ゴホンという咳払いをする隊長。

「…失礼した。おい、適当に着るもの持ってきてくれ。」

部下に指示を出し、下っ端らしき兵士が慌てて走り去っていく。

それを見届けた囚人は隊長に微笑む。

「すまぬな。ありがとう。」

隊長の表情がびしりと固まった。

見回すと他の兵士も惚けたように佇み、隙だらけになっている。

素早く立ち直った隊長が怒鳴り散らした。

「お前ら！油断するな！相手は魔族だぞ！！」

兵士たちは、はっと我に返り、立ち直っていく。

「…」

そんな様子を囚人は首を捻りながら眺めていた。

## 召喚されたのは…(2)

囚人が兵士に連れられ、通されたのは玉座の間。

じやらじやらと鎖を引きずりながら歩き、王と思われる者の前へ来ると立ち止まった。

ざわざわと玉座の間に集まった者たちが騒ぎ始める。

王族は勿論、貴族、兵士、給仕など様々な者の視線が囚人に集中する。

人々は囚人の容姿を見て恐れ、身なりを見て顔をしかめた。

兵士が持つてきた衣服は男物の薄汚れたシャツとズボン。

囚人はそれを身につけ、着替えも湯浴みも断り、そのまま、ここへやって来たのである。

自身はさほど気にならなかったのだが、周囲の反応を見る限り、どうも妙な格好らしい。

TPOの観点からすれば、明らかに場違いな格好だろう。

王はどうなのかと、ふとその姿を見上げる囚人。

囚人の視線に気づいた王は、ゴホンと咳払いをし、場を沈めた。

王が口を開く。

「念のため確認したいのだが、そなたは魔族か？」

何を当たり前のことをと思う囚人であったが、

事を荒立てる理由も無いので素直に答えることにする。

「うむ。お前たち人間が魔族と呼ぶ存在で間違いはない。」

王はうつむき、やはりかと肩を落としてた後、改めて囚人の方を見

た。

「ところで、そなたの服装なのだが…」

「すまぬが、なぜ私がここに居るのか説明をお願いしたい。」

どうでもよい話で誤魔化されそうになったのを感じた囚人は、

それを遮り、本題を早く話すように促す。

「貴様、王に対して無礼な態度……!!」

王の傍に立っていた側近らしき者が前に出る。

「まあ待て。話を誤魔化そうとした余が悪かったのだ。」

王は側近をなだめ、自らの行いを反省した。

「少し話し辛い内容なのだ。すまぬ、礼儀を欠いておったな。」

「本題に入る前に、もう一つ良いか?」

その問いに、囚人は言葉を発することなく、うなづくことで了承する。

それを確認した王は続けて問うた。

「そなた、同胞に牙を向けることができるか?」

玉座の間に緊張が広がるのを感じる。

なぜそのような事を聞くのかと疑問に思ったが、今度も素直に答えることにした。

「場合にもよるが…結論から言えば、できる。」

さらに言うならば、私は同胞に反逆者として囚われていた。」

不要だとは思うが、一応魔族内での立場も付け加えておく。

その答えに場の緊張は和らぎ、王の様子も柔らかなものになる。

「よかるう、では本題を話すでしょう。」

「まずは、そなたがここに在る理由を話そう。」

王の話によれば、ここ何年かの間で、それまで減少傾向にあった人間と魔族の闘争が突如激化。

魔族優勢で、人間は次々に領土奪われ、滅亡の危機に瀕している。

そこで、古の秘術を用い、魔族に対して有効な力を持つ者

勇者を召喚しようとした。

古の文書には、人間と魔族の争いを勇者が鎮めた、という記述が多く残っているらしい。

それにならって、勇者を召喚しようとしたわけだが、なぜか魔族

つまり私が現れたという。

「私は、勇者…なのか？」

誰に言った訳でもない、ただの呟きであったのだが、王は律儀に答えてくれた。

「分からぬ。古の文書によれば、勇者は光の力を使い、魔の軍勢を退けたらしい。

光の力とは、魔法であったり、武具であったり様々であるが…何か兆候は感じぬのか？」

そう言つて囚人を見る王。

「これといつて何も。…この魔封じの枷が影響して分からぬだけかも知れぬがな。」

囚人は両手の枷を皆に見せるように掲げ、ちらりと自身の足元に視線をやる。

じゃらじゃらと、枷につながった鎖が音を立てた。

「その枷は外せぬのか。」

王の問いを意外そうに見やる囚人。

「おい、人間の王よ、今お前たちは何と敵対しておるのか忘れたのか。

私は魔族であるぞ。嘘を語っているのかも知れぬ。

そのような者に武器を与えようなどは、何を考えておるのだ？  
とても上に立つ者の言葉とは思えぬな。」

つらつらと辛辣な言葉を王に対して浴びせ掛ける囚人。

王や側近、その場にいた全ての人々が目を丸くして、啞然としている。

「そもそもだな、先ほどの問いに關しても…」

「すまぬすまぬ、そのくらいで許せ。余が軽率であった。

…しかし、そなたのその言動、態度は信用に足るものだと思うがな。」

囚人が言葉を続けようとするのを遮り、王はくつくつと笑いを漏ら



しながら話す。

それに対し囚人は面白くなさそうに、顔を逸らした。

「分からぬぞ。これも全て演技かも知れ……」

「陛下！至急の事態です！王都に魔族が侵入しました！」

突然、玉座の間に将校らしき兵士が駆け込み、魔族侵攻の知らせ。場は騒然となった。

召喚されたのは…(2) (後書き)

二話目です。

気づけば、もうこんな時間…！

寝るべし寝るべし。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0105y/>

---

魔王勇者物語

2011年10月29日05時20分発行